

---

# [実験作品]エターナリティ

夜霧 時矢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「実験作品」エターナリティ

### 【Nコード】

N8831T

### 【作者名】

夜霧 時矢

### 【あらすじ】

幼少の頃からある奇病を患った主人公は二十年ほどの短い生涯を終えた。

それは儚くも幻想的で、終わり方としては悪くないと思っていた。だがその運命は呪われているのか、そこで終わってはくれない。

目覚めた世界は暗闇で、辿り着いた世界は物理法則が狂ったような不思議世界だったのだ。

その世界は名は「断片世界<sup>フラグメント</sup>」、区画と呼ばれる浮遊する大地に広がるそこは主人公のためだけに用意された実験場だった。

しかし、説明にきた少年からは目的も内容も何をすべきかも告げられず右も左もわからぬままに物語が始まる。

「 現在構成を練っている最中につき変更がある可能性が高いです

」

## ブログ「永遠と刹那、矛盾と秩序」（前書き）

初投稿の本気作品。

ただし試験作品につき最低三回の書き直しがあると思われる。

なお、気が乗らないとかけない人間なので更新速度は亀にも劣ると思われます。

誤字や表現の指摘や指導歓迎、特に誤字脱字の指摘は大歓迎なのでもし見つけたら教えてもらえると助かります。  
ぜひ具体的な毒を吐いて下さい。

## プロローグ「永遠と刹那、矛盾と秩序」

最初は小さな違和感だった。

ふと視界を何かが通り過ぎたような気がしてそちらを見た。

特に何も見つからなかったその時は、ただの見間違いだと忘却の彼方へ追いやった。

ただ日常を消費する毎日、その日々で得た知識は使われずいつしか霞と消えるようなそんな日々。

何の価値もないような日常ではあったけど大切に得がたいものだった事を私は知っている。

小さなころ何度か死にかけて嫌でも知らされた脆過ぎる現実、それは唐突に何の前触れも無く終わることを知っていた。

だからこそその時、それほど驚かなかったのかもしれない。

プロローグ「永遠と刹那、矛盾と秩序」

体がだるく意識がはつきりしない、ぼんやりとした頭でまづいなーと考える。

大学の講義に出ている現在、結構厳しい教授の指導はかなりキツイものがあるのだ。

目が目蓋ごと干からびているような鈍痛が動きすら鈍らせるように、それはもう睡魔が誘っているように眠い。

もし睡魔なんて悪魔が本当にいるならきつと豊満で柔らかく良い匂いですごく寝心地のよさそうな抱き枕になってくれるに違いない……、などと取り留めの無い考えが右から左へ抜けていく。

もちろんそれに趣味趣向が反映されていないとは言えないがまた別の話だ。

とりあえず風邪をこじらせたのかもしれない。

きつと見れば講義を聴いていないことなど一目瞭然だろう、みつかつたら怒られるなどはつきりしない頭で笑う。

（少しだけ眠ろうかな？ でも、見つかったら怒られるよね……、どうしたものかな。うん？）

気がつくのと、目に見えるほどのノイズが視界に混じっている。

「何……、これ？」

大学の講義中にうとうととしていた今現在、正しく現状を把握できないほど夢現だった。

だが、眠気などその一瞬で吹き飛んでしまった。

まるで古いテレビのように、たわむ様な視界に歪みと破つたところを無理矢理つなげた様なノイズが縦横無尽に走っている。

体にゆっくりとしか力がはいらない、腕を持ち上げるのすら一苦労だ。

そしてゆっくりと、喪失感が体を這い回る。

理解できない、正確には理解したくない。

だがその喪失感子供のころ何度も経験した死の予兆であり発作の始まりであり日常の終わりだった。

その現象を一言で言えば体が解ける<sup>ほど</sup>。

まるそれは、光で織り上げたものが光に戻るように、最初からそこには何もなかったかのように。

自分で見たわけではない、だがすでに子供の時片腕を失っていたから落ち着けたのかもしれない。

一番後ろの席だったのがいけなかったのだろうか、誰もこの事態に気づいていない。

そして始まる、始まってしまった先ほどとは比べ物にならない喪失感、今度は足先からゆっくりと確実に。

そして全てを受け入れた。

約束された時間が来たのだと思った。

今までだって同じような事はあったがどうにかなってきたが

きつと今回はもうどうにもならない。

なにせ、今までこんな視界が歪んだりするような事は無かったからこれが終わりなのだ実感できた。

すでに覚悟はしていた。医者からも理解不能ではあるが、もし次同じような事があれば手の施しようも無く終わりだろうと言われていた。

大学と友達に迷惑をかけてしまうなと思いつつも自分の残った腕を眺めていた。

儂い、蛍のような小さな光が尾を引くように指の先から抜けていく。

儂い、糸のような細い光が螺旋を描いて空気に溶ける。

儂い、魂の輝きはきつと綺麗なのだ最後に想おうと決めていた。視界も暗くなり始め、睡魔が眠りへと誘<sup>いざな</sup>う。

最後に心配したのは、一人暮らしを始めて飼い始めた猫の事だった。

家族は猫を飼っていた事を知らないし、家猫なので外にも出さなかった。

なぜか出ようとしないし。

(ごめんな、多分餓死させる)

ただ、悲しみをあまり残さないのが救いといえれば救いかもしれない。

幼いころに消えてしまった片腕は最初からないことにされてしまい、ほとんどの人の記憶から消えた。

誰も、腕が消えた後に残った淡く光る傷口を、その腕がつかっていた断面を不思議に思わなかった。

腕を失う前の写真がなかったらきつと誰も気づかなかったのだ、きつとこれはそういうものなのだ納得した。

ただ、解けて見えなくなった腕は確かにあり物を持つこともできたのが攻めてのものの救いだった。

消えた腕が人の記憶から消えたりうつすらとしか残らなかったが

ゆえに、きつと消えた後も悲しんでくれる人はいるかもしれないけど本当の意味で嘆き悲しんでくれる人はいなくなる。

忘れられるのは悲しいが、きつとこれは神様がいるのなら最後の慈悲なのかもしれない。

そしてそんな事を考えていたら約束の時間が来たようだ。

七色と言わず、ありとあらゆる淡く儂い光を見ながらゆっくりと意識が落ちた。

だから意識が落ちる前に最後の一言を発する。

父さん、母さん、ありがと。それなりに幸せでした。

あれからどれだけの時間がたったかはわからない。

目が覚めるとそこは真つ暗闇の中で上も下もわからない、ただ漂っているような感覚だけが体をつつむ場所だった。

目は見えない、それが真つ暗なためなのか機能していないかはわからない。

息はしている、だが手をかざしても吐き出した空気を確認できない。

つまりここは普通の生きてきた世界とは法則も違う今までいた世界ではないのだ。

体は動く、機能していないわけではないようだと言うことだけを推測する。

寒くも暑くも無く温度を感じない世界で、触れるものも自分の体ぐらいで手を伸ばそうとそこには何も無い。

動いた時に感じる体が軋むような感覚と触覚だけがまだ体があることを教えてくれている。

これが死後の世界なら酷く退屈な世界だ。

そこにあっただのは漫画や小説などで語られるような退屈や暇とい

う苦痛ではなく圧倒的な孤独感、自分以外何も存在しないと断言する確信。

周りには何も無く、自分自身も曖昧で、それ以外なんてわからない……、そんなどうしようもない世界。

そんな中でいつの間にかただ一点、お腹の辺りが暖かい。

手をやれば……、これは猫？ よく撫でてみれば尻尾が二本あり、それは自分が飼っていた猫だった。

ちなみに妖怪の類ではなくたんなる奇形児で、気味悪がられているのをなんとなく引き取った猫であり相棒だった。

（なんだ、お前もこっちに来たのか）

声も出ないようだ。

生まれるのは罪悪感、ますますもってここが死後の世界である可能性が高くなった。

ただあんな終わり方をした自分が普通に死後の世界へ行けるかは疑問だったが、もしかしたらシロが可哀想に思いついてきてくれたのかもしれない。

尊敬していたある人からなでる手はやさしく、包み込むようにと教わった。

そしてふと思い出す。

（真つ白だったからシロなんて安直な名前にしたんだっけか。今考えれば雪とかもよかったな）

笑う。

音は聞こえないがクスクスと喉が震えているのを感じる。

すでに時間の感覚は無い、大体三十時間ぐらいまでは感覚を頼りに数えていたが馬鹿らしくなってやめた。

特に疲れることも眠たくなることも無くただただ漂っていて特に精神への負荷や異常も発生しない。

これが幽霊や霊体といったものなのだろうかと特に結論も出ない考えで暇を潰す。

ここにきてから十時間目あたりですつとこのままなのかと恐怖し

叫んだのが懐かしい、無論返事などあるわけなかったが。

人間真っ暗や真っ白といった空間や完全に無音の空間ではすぐに狂ってしまうらしいが、どうやらこの世界では狂うことすら許されないらしい。

ずっとそれ以降の感情がほぼフラット、自身の事ですら変化などほとんどありはしない。

実際にはもう壊れしまっていて何も感じないだけではないのかと想ったりもしたがまあどちらでも同じことだ。

そこにあるのは七割の諦めと三割の安心。

ゆっくり考えながら気がついた事があった。

いつも体をさいなんでいたあの違和感、小さな小さな喪失感が消失している。

俺は、開放されたのか

今までであったそれは恐怖と呼べる感情だった。

何時消えてしまうのかと毎日覚悟し、諦めながら過ごす日々の中で小さな幸せを感じて涙を流した。

不自由は無いが、何時どうなるかわからないが故に車やバイクなどの移動手段を利用できず、医者やパイロットなど人の命を預かる職業にも就けない。

責任なんて重いものも背負えないが故にできる仕事はアルバイト、自由を謳歌すると言っても金も無くできるのは最後の学生生活くらいだった。

制限された日々は受け入れたもののそれなりのストレスだった。だが、もう悩む必要も無いのだ。

人と必要以上に親しくならないよう気をつける事も知り合いといふ知り合いから距離も置く必要も無い、今の孤独感なんていつも感じていたものだ。

ある程度……、後数年はまだ大丈夫だろうと甘えてしまう程度に

は孤独だったし、故に自分の境遇とよく似た「異端である何か」だったその猫を引き取ったのだった。きつと耐えられなくなりそうだったからに違いない。

引き取ったその猫はまるで中身は人間であるかのように賢かった。そんな猫しか話し相手を持たない生活も、猫の癖にこちらを気遣ってくれるシロのおかげでそれなりなものだったと思っっている。

今は開放された生活も共に歩むと決めた友もこの手の中にいる。

まあ普通の人からしたら、特にやる事も無く猫を撫でるだけのものすごくさびしい日々だろうが。

ふと、今までの人生を振り返る。

自分の人生にはそれなりに満足して終わったのが少しだけ嬉しく、終わってしまったのが少しだけ悲しかった。

自分の人生に価値を見出す人間ではななかったつもりだけど、それなりに価値があったのではないかと思う。

そんな過去を振り返ることしかできない中で思うのは、いつまでこのままなのだろうかと言う事だった。

何も無かったその時間、平穏と名付けるに相応しいそれらを思い出しながら懐かしむ。

今のこの真つ暗な世界で何かあるにしろ何も無いにしろさつさとどうにかなってくれればいいのにと、たぶん最後の弱音を漏らす。

輪廻転生なんて信じていない。

そもそも魂なんて形あるものじゃないんだから霧散しそこらにある同じものと混ざってしまい、個の概念など消し飛んでしまうだろうと思っっている。

そもそも本当に輪廻転生があるなら生前の記憶を呼び覚ます技術が確立されていなければおかしい。

何せ数十年分、へたをすれば数百年分の知識を手に入れる事ができ、その方が一人育てるよりもよっぽど効率がいいからだ。

故に、輪廻転生など普通は存在しないものとして認識してきた。

だからこそ今の状態が一体どんな事体になっているのかすら理解

できない。

考えたって情報が足り無すぎて結論が出ない。

少なくとも俺は、元の世界を仮に現実世界とするがそこでは消えてしまったのだろうという結論は出たが今の状態が元に戻るためのプロセスなのか、それとも死後の世界なのか……。

はたまたそれらとは別の何かで誰かの意思が介在しているのか。ぶっちゃけわかりっこない事を考え続けたって不毛なだけだ。

まだ寝ていた方がいい。

……なぜかは知らないが寝ることは出来る。

正確には意識を落とす事ができるだけで寝ているかどうかはわからない。

寝ようとすれば唐突に意識が途切れ、始まりと同じように特に何も無く覚醒するのだ。

だから今この時間に意味は無い、思考も余り意味はない、生きていくかどうかすら意味はない。

意味は無いが特に心配する事の無い安心して触れ合える友がいて争いも無く干渉も無いこの世界が心地いいのは確かだった。

まるで、そうまるで、母親のお腹の中はきつとこんな感じなのだろうと想像してしまう程度には。

受精して間もない体も何も無い魂はきつとこんな感じなのだろうと感じてしまう。

ただ安らいで、その時を待つばかり、きつとと夢見てその先を幻視する。

## プロローグ「永遠と刹那、矛盾と秩序」(後書き)

投げ込み日 2011/06/06  
第一回改訂 2011/06/06 凡ミス。シーン設定記号の消し忘れ  
第二回改訂 2011/06/23 一部表現修正、及び行頭にスペースを挿入。

### 覚書&反省点

会話する相手が少ないとは言え、台詞少ないなあ。  
そして思考描写「( )」が使いこなせてない、軽く泣きそう。

## 第一話 断片世界へようこそ（前書き）

見た目、読みやすさ確認のためのテスト投稿、最終的に書き足して統合します。

一話一万文字が目標。書き直して半分以下、二話統合でちょうどいい感じになる予定。

## 第一話 断片世界へようこそ

物事は唐突に始まり緩やかに終わるのが常だ。

故にこれから起こる事も唐突に始まり緩やかに終わるのだろう。

だからこそそこには良し悪し善悪に係わらず過程が存在し結果がついてくる。

祈るな勝ち取れ、さすれば与えられ

嘆くな学べ、さすれば古は糧いじこえとなり

誓うな行え、さすれば道は示される

そして、その言葉を胸に抱く者だけがその先へ行けるのだろう。

### 第一話「断片世界へようこそ」 フラグメントワールド

(……眩しい)

永遠に続くかと思われたそれもいつの間にか終わっていた。

目の前には白い光、まだ目が慣れていないために何も見えないが光が感じられる。

重力が懐かしく感じる。一体全体どれほどの時間あの空間にいたのだろうか？

とりあえず今わかる事は現実と呼べる世界に戻ってきたらしい。

ゆっくりと目が慣れてくる。

(……木？)

体を起こして見回せば見渡す限り木々、そこはつつそつと生い茂る森の中だった。

木漏れ日の入射角から考えれば太陽は真上、つまり今は昼ごろのようだ。

森の中は薄暗く木漏れ日が幻想的な光景を作り出している。  
とりあえず自身に突っ込みたい、状況を分析してる場合じゃない  
と思うんだがと。

そもそもここは何処で、なぜこんな所にいて、どうして失ったはずの体が欠けもなくあるのかが理解できない。

何がおかしいかって、もう全てがおかしい。

いくら体が消滅っぽい事になったとはいえアマゾンにでも転移したとでもいうのか？ 明らかに日本じゃない、そもそも幹から葉まで青い木ってなんだ。

黄色い植物はわかるが黒い植物ってなんだ

「こんにちは」

後ろから声をかけられた。

振り向けば子供と少年の中間のようなのが一人、とりあえず挨拶を返す。

「こんにちは」

「ようこそ断片世界へ！ フラグメント ああ、質問は受け付けるけど先に説明を聞いてほしいのであります」

何がなんだかさっぱりだが、頭から兔の耳を生やした少年が一方的に喋りかけてきた。

曰く、私は貴方の先を示すもので最低限の説明に来ている案内人

曰く、貴方は偶然選ばれたが故に光となってこの世界へ渡った。

曰く、残念もう元の世界には戻れない、しかし貴方には特別なものが与えられている。

曰く、貴方はこの世界における最初で最後の サイエンティスト 科学者兼実験動物で、  
目的を達成しなければならぬ。

曰く、貴方はこの世界で誰の思惑にも乗る必要がなく自分の成したい事を成し、なりたいたいものになればいい。

とりあえず今言えるのはだ。

「ところで貴方は誰ですか？」

「ウサはウサだからウサなのであります！ なんてボケでは誤魔化

されてくれそうにないのでありますねえ」

帰ってきたのは苦笑いとそんな言葉、とにかく胡散臭い。

そもそもこの兎、言っていることが破綻している。

目的を達成しなければいけないのに誰の思惑に乗る必要がないとか何が言いたいんだか。

実は拉致られて光になつて死ぬ変な記憶を植え付けられただけな気がしてきた。

ただ、そんなはずはないと思いたい。

あの孤独に耐えながら日々世界の美しさに魅せられた生活が誰かの作り物だなんて思いたくもない。

そもそも断片世界って何さとかシロは何処に行ったんだろとかとりあえず人のいる場所に行きたいとか色々考えなければいけないはずなのに頭がうまく働かない。

半分眠っているようなそれは、もう徹夜明けのつまらない講義に出て起きていなければいけないのと同じぐらいの拷問だ。

なぜこんなに眠いのかわからない、説明が終わったあたりからすぐく眠くてしようがない。

眠りたい、でも今眠れば取り返しのつかないことになりそうな気がするので頑張つて起きているわけだが……。

「まあうちが誰かなんてどうでもいいのでありますよ、重要なのはなんちゃって神様みたいな能力を得た貴方が辿り着くことであります」

いやどこにさ、という突っ込みはなぜか言葉にならず起きているだけで精一杯。

「貴方はこれからこの世界を形作り未来を紡がなければいけないのであります。やり直しは効かないのであります。が組み直しはできるのでそこまで心配する必要ないのであります」

そもそも理解してません、もう眠っていいですか？ ……ダメですかそうですか。

「もう無理そうでありますね。ではこれだけ覚えておくのでありま

すよ。まずは“ヘルプ”を見るのでありますよ」

……それなんてマニユアル？　そもそもヘルプってなんだって疑問は受け付けてくれないのですかという。

そんな思考を最後に俺の意識はまたも深淵へ落ちた。

目が覚めた。

未だに森の中という事はやはり夢ではなかったらしい。

足元からニヤーと猫の鳴き声、と言うかシロの鳴き声だった。

長く一緒にいると猫ごとの違いが判るらしいが、未だにわかるのはシロの鳴き声かそうじゃないかぐらいである。

「んー、どうしようっか？」

「ニヤー？」

何が？　と言いたげ。確かに主語がない。

そもそも理解できるって何事と言う反応が普通の反応なんだろうなあ。

「こんな森の中に放り出されてもなあ、どうしろって言っただろうね？」

「ニヤー」

最初の頃は相槌うつ猫ってどんなだとか色々突っ込みどころ満載だったが慣れてしまえばなんちゃって独り言にもそれなりの楽しみがあるのだ。

そもそも現代人である俺をこんな森の中にほっぽり出したウサ耳の人は何を考えているのだろうか、選ばれた人とかなんちゃって神様とか宗教なんだろうとか……。

とても混乱しているが仕方ないと思うんだ。

あれですよ、もう元の世界で見たようなアスキーアートだっけ？　顔文字とか言っただけなあ？　もうシヨボーンという感じである。

間違いなく死にますよ、まず水の確保の仕方がわかりません、テレビでやってた嘘が真かって話ぐらいしか知りません。

そもそも森の中で食糧ってどうやって探すんですかという話である。

嗚呼、第二の人生が終わるのは意外に早いようでまったく意味がない気がするんだよね、ここに放り出してくれた誰かさんはきつと考えなしである。

まあ前の毎日おびえて過ごす人生に比べたらまだましなのだけれども。

「そう言えばヘルプうー!？」

目の前に<sup>プラスチックのイタ</sup>プラ板が現れた。

「ニヤー!」

「ちよ! シロ!？」

現れたプラ板には「ヘルプを表示しますか?」の文字と「Yes」「No」という二つのスイッチが現れたのだがシロが「No」を速攻だ!と言わんばかりに連打している。

残念ながらシロの手はプラ板らしきものを触れず空を切っているわけだがあれか、これが噂の立体映像というやつか。

とりあえずどうすればいいのだろうか、触れないみたいだし。

音声認識か?

「イエス」

反応がない、あれか、俺今とんでもなく恥ずかしい間違いをしましたが? 時々不慣れなお爺ちゃんとかがタッチパネルの前で読み上げればどうにかなるのではという感じのあれと同じ。

恥ずかしい、超恥ずかしい、穴掘って潜り込みたいレベルだぞこれ。

とりあえず指で「Yes」のボタンを押してみる。

「おお?」

「ニヤー」

押した感覚はなかったがしっかりとYesのボタンが押せている。

そしてシロはなぜかがっかりしている。

あれか、お前は俺に人生ハードモードでGO<sup>ゴ</sup>とでも言いたいのか、私の趣味はYes<sup>イエス</sup>と答えると思っっているやつにNo<sup>ノー</sup>言っつてやる事だっつて言うあれなのか。

まあ、とりあえず出てきたメニューらしきものを見てみる。

「……………まてや」

表示された項目を見て数秒固まってしまった。

もう表示されている項目が意味不明というかぶっ飛んでいるんですが誰か助けてと涙目になる俺なのであった、まる。

そもそもなんなのさ、「ようこそなんちゃって神様」とか「ブロックの設定と作り方」とか「ブロックの統廃合」とか「この世界の生き物について」とか。

しかも一番下にはわーどばい兎の人って誰やねん。

とりあえず「この世界の生き物について」をポチっとな。

出てきたのはまるで図鑑のような何かだった。

写真とその名称、特徴、そして謎の項目「仲良くするには」。

そして一ページ目がひどい、「人類っぽい何か」って何さ何かかって。

写真は大事な部分を隠した男女の裸の図、特徴はほぼ人類と変わらないように仲良くするには「頑張っつて人間関係を築きましょう」、当たり前じゃボケ！

というか人類だろこれ！ 絶対人類だろこれ！！

後、理科の教科書に載っつてるような解説図で興奮したりしないから変に恰好つけた写真にする必要もないと思うんだ。

この世界はいつたいどれだけ突っ込ませれば気が済むんだ、オラもう疲れたぞ……………。

まあネタに走っても何も変わらないわけで次のページ……………、なんですと？

エルフっ娘<sup>こ</sup>がいるだと!？

種族名は違うみたいだが。

はいはいワロスワロス次のページっと、ああもう驚かないよ？

ドワーフとかフェアリーとかヴァンパイアとかファンタジーが出てきても驚いてなんかやるもんか。

というか本当にいるんだろうか、いたら見てみたい。

(おお、これはこれは……。すごく、美人です)

んー、喜べ元の世界のオタクども、リアル獣娘がいるみたいだぞ。

(残念だが主人公は人の事言えるほど健全な人間ではない)

どうやら今見ていたのは「人型」という項目らしい

とりあえず他の項目としては獣、鳥、魚等動物から昆虫までより取り見取りと言ったところ。

後ハーフってのがあらしいが明確に分類はされていないようだ。後は植物系といった一般的にファンタジーに分類される物や幻想系といったまるつきりファンタジーなものまである。

そして、本日最も重要で貴重な項目もとい情報を発見する。

他にもいろいろある項目は読み飛ばし最後の項目、食物系。

どうやらこの世界には五穀が存在していて一般的に食べられているようだ。

そもそも食べ物だけ別項目ってあれか、狙ってるのか、何狙ってるのか知らないが。

日本系と言われるような食べ物もそのものや似たようなものかなりの数あるようだ、見たことない物も多いが。

それ以外にも木の実やキノコなど食べられるもの、食べられているものもすごく多いようで、今見回して目につく範囲にも図鑑に載っていた食べられる植物がちらほら見える。

ただ、そこいらに見える食べられる何かは栄養価や味などは二の次でそんな時の緊急用といった項目としてのっている。

まあそうだな、仮に美味しい物がどこにでもあったとかとかなんな天国だという話だなしな。

とにかくだ、今どうするべきかが問題だ。

前に読んだなんちゃってサバイバル鉄則三箇条、水、食べ物、寝床の確保だ。

結局全部確保しないといけないが先に確保すべき順番に並べてあるらしい。

水は確か太い蔦とか切れればある程度手に入ったはずだ、糞まずいらしいけど。

そもそも蔦植物が見当たりません、諦めて川でも探しましょう。食べ物はずつきのヘルプ見ればどうにかなるとして、寝床……。

「探すしか、ないか」

正直グツタリである。

寝床って、洞窟でも探せというんだらうか？ なぜ具体的な事ほとんど書いてないのさと問いたい。

そして、シロをだっこしつつ彷徨う事十分ほどでシロはだっこされるのに飽きたようで後ろをついてくる……、ああ癒される。

さらに一時間ほどでお腹減ったと泣き始めた。

そういやシロのエサどうしよう？ ペットフードなんて持ってきてないし猫がどんなもの食べていいかまでヘルプに書いてなかった。

「俺だつて腹減ってるんだから我慢しろよ、寝床見つかるまではさ」  
しかたないな

二一と答えるシロ。

シロ限定で猫の言葉がわかる俺はきつと変質者っぽく見えるに違いない。

それにしても人がいない、何より青い植物が多い事多い事、一体どうなってるんだっていうほど周りの植物が青くなってきた。

あれか、もしかして俺人外魔境に迷い込んだ？

さらに歩くこと数時間、シロが寝た。

というかあれですよ、だっこされながら寝るの好きだよねシロ俺結構大変なんですが揺れが強いとひっかくのやめてもらえます？

そんなこんなでさらに一時間ほど、初めて森を抜けた。

二階建てのデカイログハウスを発見、正直青い森の中にある茶色

いログハウス、場違いすぎて笑うしかない。

ノックする物の返事はなく、鍵も存在しない、住人の名前が表札で出てるがなぜか俺の名前に見えてしょうがないこれは幻覚だそうに違いない。

そしてシロ、貴様苗字あったのか。

なんだ猫柳って、なんだ猫柳って、某掲示板のネタとして大事なので二回言ってみました。

あれだ、もう現実逃避やめよう。

精神的にどつと疲れたわけだが、いつそ殺せと叫びたい。

無論死にたいわけではないが。

「ここどこだよー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

あえて言おう、魂の叫びだったと。

泣いたら負けだ、しかしさすがに泣いても誰も責めないと思う。

とりあえず家の中を探索する事に……、さすがに同姓同名の人間がこんな場所に住んでいると俺も思わんよ？

ついでに言えば食器とかはあるくせに生活臭と言うか気配というか全くしないし俺のために用意されたものなのだろうとしか推測できない。

蛇口をひねったら水が出ました。

食器まで全部木でできてるのに微妙にオーバートテクノロジーです。何よりドデンと突っ込みどころ満載の冷蔵庫がポツンと寂しく置いてあるのに笑った。

冷蔵庫の中には無駄に猫缶が置いてあった。中央においてあつたメモによると次の補充は明後日のようです。

俺の食料は！？

あれか、お前は猫缶でも食つとけとぬかすか！？ 泣くぞ、泣い

ちやうぞ！

なんか外も暗いし今日はシロに餌やってもう寝よう、寝るったら寝るのだ。

次の日目が覚めるとそこは天国だった。

全方位からミーミーニーニー子猫が鳴いてすり寄ってくる。

柔らかい、可愛い、萌え死にそう、これは逝ける！

「ってなんでやねーん！」

ベットから飛び起きた。

残念ながら夢落ちである。

いったいなんなんだあの夢は本当に。

おなかへったよー  
ニーとシロが鳴く。

猫缶を開けながらお腹減ったなーとか、せめて地図があればなーとか、初めての遭遇まだー？ とか。

考えても仕方ない、とりあえず生き抜くことを考えるべし。

とりあえず水と寝床はどうにかなったから食べ物か。

ヘルプによるとここら辺でとれる食べられる草（？）だけでは栄養がたりないらしい。

なのでタンパク質、可能なら肉を食べなければなららしい。

もうどうしたらいいやら……、いきなり放り出されたって何していいかわからんがな。

少なくともここは自分の知る現実<sup>リアル</sup>、地球じゃない。

まず、この世界を理解すべきなんだろうな。

「しかたないか、ヘルプ。選択すべきは」

そう、ハローワールドっぽい定番句のする「ようこそなんちゃって神様」である。

ポピツと馬鹿にしたような音になって……、テキストファイル（

書類？）が開かれる。

ようこそなんちゃって神様

貴方はこの世界を構築していく先導者として選ばれました。

この世界がどんな世界になるかは貴方次第、より良い世界を構築して下さい。

なお、元の世界には戻れません。そもそも貴方のいた痕跡が時間と共に消えて行っています。

この世界に来てから二十四時間ほどで完全にいなかった事になるでしょう。

また、一度消えた痕跡は二度と元には戻りませんしそれに違和感を覚える人もいません。

この際第二の人生だと思って張り切って世界を構築して下さい。

PS・世界を思い通りに組み立てられるわけではありませんが頑張ってください。

「なんとというか……。予感は何となくしてたけど元の場所へは戻れないか」

そもそも元の“世界”ときた。

どうやらここは地球ではないどこからしい。  
とりあえず次だ。

ブロックの設定と作り方

1・基礎知識早わかりQ&A m p ; A

## 2・ブロック構築詳細

ふむ？

えふえーきゅーっと。

Q・ブロックとは？

A・一辺を1kmで構成される正方形で独自の環境を構成する大地または区画の事である。

Q・ブロックを統廃合くっつけたりきりなしたりするとどうなる？

A・くっつけた数に応じて上空及び地下が拡張されます。  
ひとまとまりのブロックをマップと呼びます。

Q・ブロックは自分で整備しないとイケないの？

A・ブロックは作成時自動または手動で環境が設定され維持されます。

環境そのものはある程度変更する事ができます。

Q・違う設定のブロックは統合できるの？ したらどうなるの？

A・統合できます。統合すると互いの環境に影響を与えます。  
また、環境の関係により片方に片方が呑み込まれてしまう場合があります。

Q・ブロックって作らないとイケないの？

A・すでにあるものを利用する事もできます。

リストを参照してください。

これはつまりあれか、作らなくてもある程度ブロックはすでにあるんだろうな。

まあ説明書見るのはこれぐらいにしてとりあえずここがどうなってるのか調べなくちゃな。

えっと？ ああ、この「block Creation」ってやつか。

えーと、「list」？ ああ現在あるマップの一覧か。

マップ名称	ブロック数	基礎ブロック設定
ベース「現在地」	0001	蒼月の森
狐の集落	0034	緑光の森
賢狼の洞窟	0017	木漏れ日の洞窟
草食獣の草原	0250	湿原+草原
祝福の森	0250	広葉樹系森
試練の杜	0250	針葉樹系森
生き無しの砂漠	0250	砂地系砂漠
血狂いの猛獣	0132	肉食獣の楽園
絶望の沈む地下遺跡	1000	自己増殖型地下茎

・次のページ「」

なんというか……、名前が中二病臭い。

名前である程度わかるけど、なんなんだ血狂いがうんたらとか絶望がどうたらとかやけに物騒な名前があるんだが、あれか、弱肉強食系か。

……地図とかはないんだな、これ自分で探索しろってことなんだ

ろうか？

まあとりあえず今いる地点は一キロの正方形の上ってことか。とりあえず調味料はあったし食べ物はどうにかなりそうだな。なぜか水も水道もとい蛇口あるし、問題ないに違いない。

生き残る用途は……、ついたのか。

はてさてこれからどうするべきか……、今まで人と交流も持つてこなかったしまず友達でも作るか？

そもそも人型の知能持ちってどのマップにいるのって話なるが。

「とりあえず、このマップの端にでも行ってみますか」  
しかし外は暗かった。

中が明るいのは無駄に電気が通っているせいで証明があったらしい。

「よし寝よう」

まだ夜だったらしい。

シロ、後で覚えてるよ。

とりあえず証明のスイッチを探し当て消して寝た。

翌朝目が覚めるとそこは天国だった。

ピコピコ動くそれは魅力的で、ゆらゆら揺れるそれは魅惑的だった。

良い香りがして柔らかくて可愛い猫耳娘がつて明らかに

「夢じゃボケーーーーーー！」

なんで自宅なのさ！ なんで夢の中で自宅なのさ！ リアル 現実にそんなもんいるわけねーだろうが！

「夢落ちの馬鹿野郎ー！ ちよつと期待しちまったじゃねーかー！」

無論初遭遇にである、変な事を期待したわけでは決してない、無  
いっいたら無い。

ごめんー瞬ちよこつと期待した。

……優しくて緘黙で可愛い彼女欲しいなあ。

可愛いは綺麗でも可だがそんな事はどうでもいい。

とりあえず窓から外を確かめるが明るくなっている。

太陽の位置もそこまで高くないようので、どうやら普通に朝起きれたらしい。

シロに猫缶を与えつつ朝の澄んだ空気を吸い込む。

不思議と昨日の事は覚えているのでパニックにはならなかったが、よく考えるとパニックにならないの方がおかしいのだろうか。

まあ世界は何事もなく回るものであるので何の問題もない。

今回の異世界転移はともかくそうポンポン大事件に遭遇してたまるかと言う話である。

とりあえずシロはここでお留守番させてこのマップを探索する事にしよう。

確かここは一ブロックって言ったか？ 距離は一キロしかないし適当に歩けば問題ないと思う。

思うので外へ出てとにかく歩く。

歩くつたら歩く。

歩く歩く歩く。

歩く歩く。

走った。

ごめん、迷った。

「ダメじゃん！ うち全然ダメじゃん！」

今回は道を覚えるシロもいないのでお手上げである。

とりあえずやはり歩く、もうそれしかできない。

すこし休憩しようとかい木の根元に腰掛ける。

「風が気持ちいいのに迷子って……、空気良いのに迷子って、複雑すぎる」

吹いている風が気持ちいい。

きつと森林浴的な効果もあるのだろう。

休憩して……、寝てしまつたらしい。

目が覚めると目の前にはヘルプで見たような材質に見える手紙の

アイコン？ が点滅している。

とりあえず押せばいいんだっけか。

あまりにもかわいそうなのでゲームで言う所の自動地図作成機能マッピングをヘルプボードに追加しておきます。

連絡はたぶんこれで最後です、がんばれー。

b y 兎の人

だから誰やねん兎の人！

というか見てる？ 見られてる！？

まあ気づかない時点でうちが阿呆だつたというだけの話。

とりあえず地図を見てみると家のアイコンの周りをぐるぐる円を描くように通つた跡がある。

どうやらうちはとんでもない方向音痴だつたらしい。

そりゃそうだよな、もうなんか一キロ以上歩いてる気がするし。

前の世界でそんな事なかつたけど、サバイバル技能は適性がないようだ。

とりあえず家に戻ろう、そうしよう、もう疲れたよパ ラッシュ。

ゴールして、いいよね？

無論ゴールは柔らかいベッドである。

そして帰るとそこには、シロが猫ミニ少女に

「なってるわけないわなあ。頭いいけど普通の猫だもんなお前」

ニヤァ？ とシロ。

当然のことながらポ モンみたいに進化でもしない限りシロは猫である。

せめて喋れたらなーと一昔前に思ったのが懐かしい。気を取り直して水分補給と休憩を済ませ、再度探索へ。

今度は地図を見ながら最外周を目指す。

そもそも一キロなんて十分あれば十分歩ける範囲である、本来はあんなに迷ったのは見渡す限り似たような感じだからしょうがないと思いたい。

とりあえず最外周へついたが……。

「……なんだこれ」

上も下も右も左も全部空である。

背後だけは今抜けてきた森、境はまるでガラスでもあるように手を外に出せない。

そしてその向こうは見渡す限り青空だった。

たまーにブロックがちよろちよろ浮いているが元の世界で見た雲よりも小さい。

相当遠いらしい。

これ、うちにどうしろって言ってるんだろっか。

あれか、くつつけないと移動は無理って事なのか。

「ヘルプ」

表示された項目に新しい項目が増える。

「new 新しい項目について」

「new ブロックの移動について」

どうやら順次情報が更新されていくシステムなんだろうと思う。

一回で全部表示しろと言いたい、なんだその手抜きは。

もしかして兎の人これの更新が忙しくて連絡が取れなくなるって事なのか？

とりあえず内容を見てみよう。

結論から言えば、うちが得た知識や経験から新しい項目が追加されるらしい。

ブロックの移動については連絡船のようなものが飛ぶらしいが、このマップにはこないらしい。

連絡船がくるマップをつなげるしかないのだろう。

とりあえず今はできる事もないし今日の分の食料を集めよう。

昨日は適当に食べたからなあ、やっぱ天ぷらぐらいだよ野草を食べる時って。

ふと思ったが人間用の食料はないくせに調味料とか油とかガスレンジモドキとか無駄に料理しろと状況が言っていたのが不思議すぎる。

そこまで用意するなら食べ物も用意しといてよと激しく言いたい。気づけば外が暗くなっている、今日はもう寝ようと思う。

明日はどこかブロックつなげよう。

オヤスミナサイ。

**第一話 断片世界へようこそ（後書き）**

前半部分を投稿完了

中盤部分を投稿完了

最終部分を投稿完了。

第一話投稿完了！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8831t/>

---

[実験作品]エターナリティ

2011年10月1日03時22分発行